

スタンダールは『恋愛論』を自分の 主著とみなしていたか

粕 谷 雄 一

1842年のスタンダールの死後、彼の初の全集（ミシェル・レヴィ Michel Lévy 版、1853-1855）が刊行されるに際して、仕事の中心になったのは友人で遺言執行者のロマン・コロン Romain Colomb（1784-1858）であった。スタンダールが十九世紀フランスを代表する作家のひとりとして現在も読みつづけられていることに関してコロンの功績はまことに大きい。

ところで、友人として作家の人となりをも後世に伝える証言を残していることによっても重要な存在であるコロンが、

「ベイル（スタンダール）は常に『恋愛論』を自分の主著 son œuvre principale とみなしていた」

と書いたことが知られている。これは考えてみれば大変なことである。スタンダールは『恋愛論』を『赤と黒』や『パルムの僧院』より上においていたというのだろうか？ それが本当ならなにか理由があるはずだが、一見無秩序きわまりないこの本のどこがそんなに重要なのか？ ここに世界の研究家の困惑がある。たとえばスタンダール邦訳全集版『恋愛論』解説でもこのコロンの証言を紹介したあと生島遼一は「これはなぜだろう？ わたしの見るところ、これは狭義の『恋愛論』ではなく、スタンダールの人および思想体系を考えるうえに、重要な手がかりを与える資料なのだ・・・」と論を展開している¹。

「『恋愛論』主著」説の流布がどういう帰結をもたらしたかについてはまた稿を改めて考察する予定である。本小論の目的はこのコロンの証言の妥当性を考えてみることである。

1. 証言の出典について

邦訳全集版『恋愛論』解説ではコロンの「『恋愛論』主著」証言の出典について「『スタンダール中・短編集』（*Romans et Nouvelles*, Michel Lévy, 1854）

の巻頭に収められたロマン・コロンの *Notices (sic)*² と記してあるが、これは誤りである。典拠となったと思われるシャンプイオン Champion 全集版『恋愛論』(1926)の序文 cxxiv 頁でダニエル・ミュレール Daniel Muller が述べているのは、この証言はコロン生前には発表されなかった *Appendice inédit* 『未公刊補遺』と彼が呼ぶ手稿のなかにある、ということなのである。この *Appendice* が、まさしくミシェル・レヴィ版全集『中・短編集』の巻に収録されている『アンリ・ベイルに関する覚え書』*Notice sur Henry Beyle* 「への補遺 *Appendice*」という書かれ方をしているのが誤解を招いた原因だろうか³。ともかくミュレールの引用するコロンの証言を以下に示す。

この本に対する公衆の冷ややかさにもかかわらず、ベイルはこの本を常に自分の主著とみなしていた。彼がその死までこの本に特別な愛着をもって手を入れていたところを人は見ている。そういうわけでわたしは彼の遺稿の中にいくつもの断片を見つけ、ミシェル・レヴィ版に収録した。それらを x 頁から xxiii 頁、222頁から226頁、227頁、311頁から367頁に見ることができる⁴。

さてこの『未公刊補遺』であるが、その執筆動機についてコロンは冒頭で以下のように述べている。

1854年1月25日、ベイル作品集の、わたしの『覚え書』(『アンリ・ベイルに関する覚え書』のこと。以下同様)を収録した巻が発売された。この『覚え書』はわが友についてわたしが公衆に伝えておくにふさわしいと思われたことがら全てを含んでいる。しかしながら生涯のいくらかの部分に秘密、あるいは少なくとも忘却にとどめるべきでないような人間というものはめったにいないものである。そういう部分とは、興味の薄い部分であるか、あるいはそれを公表すると好ましい姿のもとに見せてやりたい人物の声望に傷がつかねない部分である。もちろん好ましい姿とは言っても伝記作家は真実を守り、真実からけっして離れてはならないことは言うまでもないことだが。

わたしの記憶から失われるかもしれないいくつかの小さな事実をわたしはここで語ろうと思う。それらがベイルの伝記を補完してくれることだろう。距離をおいて見るならこれら小さな事実はしばしば大きな出来事より人々の興味をひくものである。[...]

これらの補足記述が時間的順序を保つために、わたしはそれぞれの文の頭に『覚え書』の中でつながるべき個所の頁数、段落を書いておいた⁵。

「小さな事実」への愛をコロンはその友から受け継いだのだろうかと考え、興味深いところである。内容には王立図書館就職失敗の件、モンチホ夫人—ナポレオン三世皇后ウージェニーの母である—との交友など、確かに公表を控えたくなる理由のありそうな逸話が並んでいる。

この『未公刊補遺』を最初に紹介したのはアドルフ・ポープ Adolphe Paupe 著 *Histoire des Œuvres de Stendhal* (1903) のようである。この本はスタンダール作品、作品研究、そして作家研究にどのような著作、資料があるかをまとめたもので、『未公刊補遺』は《Les Historiens de Stendhal》という表題で作家の伝記的研究を扱った部分に出てくる。ただしこれは非常に不完全な紹介であった。なぜならポープは上に引用した序言だけは全体を載せているものの、追加記述本文は要約の形にして載せているからである。しかも奇妙なことにその要約のなかに問題の『恋愛論』に関する部分が欠けている⁶。ところが同じ本の別の個所、『恋愛論』そのものの研究史解説の部分でポープは『恋愛論』に関するコロンの上記の証言本文を引用しているのである⁷。このことからして『未公刊補遺』の要約の部分で『恋愛論』関連個所が抜けているのはおそらく単なるケアレスミスなのであろうと推定できる。

『未公刊補遺』全容が明らかになったのはカジミール・ストリエンスキー Casimir Stryenski が *Soirées de Stendhal Club* (1905) を出版したときである。ポープの本では要約になっていた部分も本文全部が一もちろん『恋愛論』関係部分も含めて—この本に収録された⁸。

そして『恋愛論』に関する部分だけに関しては、先に述べたようにダニエル・ミュレールがシャンピオン版全集『恋愛論』序文で引用した紹介がある。その際ストリエンスキーの名もポープの名も言及されておらずミュレールはあるいはオリジナルの手稿を見たのかもしれないが、その可能性は低いと思われる⁹。

実はオリジナルのコロンの手稿を見て書かれた可能性のある『未公刊補遺』紹介はこれだけなのである。1969年にヴィクトル・デル＝リット Victor Del Litto が出版した *Mon cousin Stendhal* (Parma, Istituto statale d'arte Paolo Toschi) に収録された『未公刊補遺』は、デル＝リットがことわっている通りポープの *Histoire des Œuvres de Stendhal* の該当個所の写しであり、したがって元の本にない追加記述本文はデル＝リットの本にもなくポープの要約がそのまま載せてある。『恋愛論』関連部分要約が抜けているのもポープと同じである。なぜストリエンスキーの本を援用しなかったのか理解に苦し

むところだが、ともかくデル＝リットはこの本の注で、残念なことにコロンの手稿がこの時点までに紛失してしまっていることを伝えているのである¹⁰。

2. 証言の背後にあるもの

さてシャンピオン版序文でミュレールは、『未公刊補遺』においてコロンの、『恋愛論』全集版初版にこそ入らなかったものの比較的早い時期に執筆されたと考えられる部分をあたかももっと最近の筆であるかのように記述しているとして難じている。

コロンは間違えているか、あるいは読者を欺こうとしている。彼の全集版の222頁から226頁は『フィアスコ』の章であるが、これはもう1820年から存在していた。297頁の断片(バレンシアのドニャ＝イネジリアの話)¹¹も他の時期に置く根拠がない。311頁から367頁の三つの断片(『ザルツブルクの小枝』『エルネスチーナ』『フランスの富裕階級における恋愛の一例』)は確かに1825年の筆である¹²。

ミュレールの見解は現在でも有効であろう。厳密に言うコロンは「スタンダールの遺稿の中に見つかったものを収録した」と言っているだけで、それが生涯のさまざまな時期にわたるものだとは書いていないのだが、読む側からすれば確かにそのように読めてしまう書き方にちがいない。コロンは疑いなく意図的である。しかるにこの「彼がその死までこの本に特別な愛着をもって手を入れていたところを人は見ている」《On le voit s'en occuper jusqu' à sa mort, avec une affection toute particulière》¹³という表現が示唆する継続的な作業が行われていたことを証明するものは、ミュレールが言う通り見出しがたいのである¹⁴。

コロンの編集した全集版テキストは1822年の初版と相当の異同を示しているので、あるいはスタンダールの修正ノート、「その死までの継続的な修正の仕事」を含んだノートがあってそれをコロンが用い、ノートはのちに紛失したということならありえないわけではない。しかしこれはガルニエ Garnier 版編者アンリ・マルチノー Henri Martineau の言う通り確かめようのない話であり¹⁵、だいたいコロンは未刊行の章の追加のことばかり言っていて作家による語句の修正のことは言っていない。ちなみにスタンダールの自筆加筆修正のある『恋愛論』自家本は3冊現存するが、コロンがそれらを参照した

形跡はない。

いまひとつ注意したいのは「死のときまで離れることがなかった」のは別に『恋愛論』だけではないということだ。書き込み用の自家本を作り、出版後何年もたったあとで折りに触れて加筆修正を加えるのは彼には普通のことだった。死の時も『ラミエル』や『尼僧スコラスティカ』を執筆中だったわけだが、そのことは既刊の作品への加筆修正作業を妨げることは全然ならなかったはずである。立派な序文を書くということと重みは違うが、同年の初頭には『パルムの僧院』の構成について有名な「ブラネス師必要」という決定を下しているし¹⁶、その前年にも10年以上前の作『ローマ漫歩』の修正を試みている¹⁷。スタンダールというのはそういう仕事の仕方をする人なのである。

『恋愛論』の「内容を豊かにする」仕事を「継続的に」していた形跡はないのにそれを強調する書き方の萌芽は、全集刊行に際して出されているその趣意書 *Prospectus* に見受けられる。

この全集版において『恋愛論』は、いわば分量を倍加していると言っている。すなわち著者はこの本を作り直したのであり、もとの本から生まれる着想は尽きることがないので、彼は死のときまでこの本を離れることがなかったのである。それゆえ我々が読者に予告するのは全く新しい著作ということになる。以前に読めたものはその最初の素描に過ぎなかったのである¹⁸。

章をいくつか追加しただけで「倍加した」とはたしかに誇大広告的であるが、ここでもコロンは内容が豊かになったことは言っているが語句修正のことは念頭にないようである。

実際に「生涯にわたった」かもしれない語句修正はともかく、前面に出している内容増加の方はほとんどが同じような時期に書かれたものばかりだとしたら、スタンダールが『恋愛論』を豊かにする作業に生涯にわたって継続的に取り組んでいたとほのめかすコロンの誠実さが疑わしくなってしまう。しかしこれが虚構だとしたら、なんのためにこんなことをするのか、動機は不可解というしかない。

筆者にはむしろこのコロンの態度に、遺稿の整理に着手したとき20年も前に出されて全く売れなかった『恋愛論』再版時のためにスタンダールが序文を3つも書いていたということに対する驚き、とくに死の数日前に書かれた序文があるのが分かったときのコロンの驚きの反映を見る方が自然であるよ

うに思われる。この第三の序文発見の驚きが『恋愛論』に関してだけとくに「死のときまでこの本を離れることがなかった」という言い方をする引き金となり、それに引きずられる形で『恋愛論』刊行数年後に執筆されていた追加材料を生涯にわたる継続的な仕事の成果であるかのような書き方をした『趣意書』が生まれ、最後に『未公刊補遺』の「『恋愛論』＝主著」という証言にまで至った、という流れは考えられないだろうか。

「ベイルは常にこの本（『恋愛論』）を自分の主著とみなしていた」という言い方は、友人として長年スタンダールと行動を共にしたコロンの『赤と黒』の校正を共同でしたほどの仲であったコロンが言うからには、作家が生前ときどきそのような意味のことを口にするのを聞いたことがあるかのような印象を与える。しかしそれなら『未公刊補遺』などではなく『趣意書』や全集版『覚え書』などでそれを述べなかったのは不自然ではないか。「『恋愛論』＝主著」というほど『恋愛論』を高めたのは『未公刊補遺』執筆中のコロンに浮かんだレトリックであり、スタンダール自身はそこまではっきりした態度はとっていなかった可能性を、筆者は否定し去ることができないのである。

たしかに「『恋愛論』主著」証言がやはり真でありコロンになんらかの配慮が本当であってその早期の公表を避けたというのはもちろんあり得べきことである。たとえばレアリズム傾向が強くなった文学潮流の中で『恋愛論』のような妙な本を主著と見なす著者の像を読者に提示するのを避けたかったという動機は一応考えうる。しかし『恋愛論』は確かに読みにくい本ではあるが豊かな考察に富む著作であり、だいたいこれは小説ではない。全集刊行にあたってコロンにアドバイスを求められたバルザックも、スタンダールの評価を下げるような作品は省いた方がいいと忠告しながらも『恋愛論』は収録する価値のあるものとして推薦しているのである¹⁹。スタンダールに「『恋愛論』＝主著」発言ないしそれを示唆する言動が本当にあったとして、コロンがそれを奇矯なものとして公表をためらうというのも考えにくいのではないか。

3. 結 論

以上のことから次のように述べておきたい。スタンダールが『恋愛論』を主著とみなしていたという証言を完全に否定できるほどの証拠はない。死の数日前に再版時用のあらたな序文を書くほどだから特別な思い入れがあることは疑いないのであり、折りに触れてコロンを初めとする友人たちにそのような趣旨のことを作家が口にしていただろうという可能性は否定できるものではない。し

かし周囲の状況を見るにつけコロンのこの証言はかなり留保してうけとるべきものである可能性があり、少なくとも対外的にスタンダールが『恋愛論』を『赤と黒』や『パルムの僧院』より上位に置いていたと信すべき十分な根拠にはならないように思われるのである。

注

1. 生島遼一「『恋愛論』の周辺」(『スタンダール全集』第8巻『恋愛論』『恋愛書簡』解説)、人文書院、1977(初版1972)、p. iii. コロンの問題の証言が日本では最初にどこで紹介されたかについては詳らかにしなかった。諸兄の寛恕を請いたい。
2. 前掲書、p. xiii.
3. Muller の記述は《Appendice inédit à sa Notice sur Henry Beyle (2e partie)》(p. cxxiv) となっている。
4. *Ibid.* (以下日本語訳はすべて筆者によるものである)《p. x-p. xxiii》は遺稿から発見された三つの序文を掲載した部分である。指示された残りの頁数がどこに対応するかは下のミュレールの引用を参照。
5. 底本は後にあげる Casimir Stryenski, *Soirées de Stendhal Club* (1905)。
6. p. 297-300.
7. p. 33-34.
8. p. 327-340 (『恋愛論』に関する部分は p. 338-339)。結局『未公刊補遺』のオリジナルから本文全体を掲載したのは後にも先にもこの本だけである。
9. 問題の手稿はストリエンスキーの所蔵であった。ポープもそれを明記している(*op. cit.*, p. 297)。
10. *Mon cousin Stendhal*, p. 151.
11. 現在の『断章170番』である。
12. *Op. cit.* p. cxxiv.
13. 《On le voit s'en occuper》という表現で voir 「見る」が現在形であるのもまた曖昧さを生んでいる。スタンダールとコロンの関係を知らなければ、実際に「そういう姿が見うけられた」というより「そうであったと見える(判断できる)」の意味と解する方がむしろ自然である。
14. 三つの序文はたしかに執筆時期が長い期間をまたいでいるが、そのうち第一と第二のものの執筆時期は1826年5月、1834年5月でそれぞれ他の未刊部分が多く書かれた時期、大量に売れ残った『恋愛論』初版をさばくために表紙を付け替えただけの疑似再版発売後の時期にだいたい対応すると言っていい。第三のものは1842年3月15日の日付け入りであり確かに3月23日の彼の死の直前であるが、死の前日22日まで『尼僧スコラスティカ』の口述が行なわれているのだから、コロンが強調するように(「ベイルは同月23日に死んでいるので、おそらくこれは彼が最後に書いたものである」*De l'Amour I*,

Michel Lévy, 1853, p. xvii.) この第三の序文がスタンダールの絶筆であると言うのはためられる。

15. *De l'Amour*, Classiques Garnier, 1959, p. xxxviii.
16. *La Chartreuse de Parme I*, Cercle du Bibliophile, p. 52.
17. *Journal V*, Cercle du Bibliophile, p. 282.
18. *Op. cit.* p. 3-4.
19. Lettre à Romain Colomb, le 30 janvier 1846 (*Correspondance V*, Classiques Garnier, 1969, p. 97). バルザックが『結婚の生理学』などで『恋愛論』から得た題材を活用していることは周知の通り。

以上の論考をまとめるにあたって Association des Amis de Stendhal の Jacques Houbert 氏から親切な助言をいただいたことをここに感謝しておきたい。もちろん論の構成、結論が粕谷のみに帰するものであることは言うまでもない。